

### 進級一括

○五月十八日進級したる人々左の如し

四級へ 朝山憲治、伊豫田三郎

○六月十一日進級したる人々

三級へ 千葉強三、清水邦雄、朝倉萬盛

二級へ 谷岡謙、土屋安、塚泰吉

○十一月十七日の昇進者

四級へ 岩田順一、峯岸鎮治、酒匂秀太郎、五月女光三、松岡恭平、湯村藤助、伊庭謙造、松村松之助、本山小彌太、

松尾恒四郎

三級へ 小原善次郎

## 一一 明治四十年史

### (一) 卒業生送別紅白勝負

本年度卒業の部員諸氏の爲に、二月二十二、三日の二日間に亘りて、送別紅白勝負を行つたが、二十三日の取組は左の

通りであつた。

(紅)

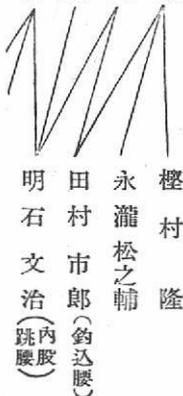
(足業) 白井善藏

(跳腰) 土屋安

(巴投) 谷岡謙

(足拂) 瀬良是助

(五人掛)



(白)

櫻村隆

永瀧松之輔

田村市郎 (釣込腰)

明石文治 (内股跳腰)

(巻込)



二段

塚本太作

○(絞)●

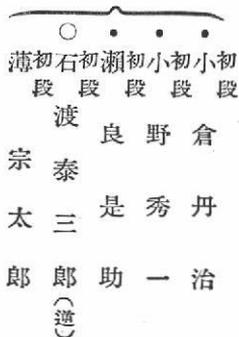


(大外刈)

二段

中野榮三郎

○(巻込)●(痛分、痛分)



## (一) 慶應義塾創立五十周年柔道大會

我が慶應義塾は、安政五年の創立より本年を以て五十年に達し、四月二十一日其祝祭が舉行された。體育會各部に於ては、二十三日より二十七日迄記念大會を催すことゝなつたので、柔道部も此の祝節を飾らんが爲め、二十五日午後一時より綱町道場に大會を開き、各學校より選手を招き、盛大なる勝負を行つた。

今當日の模様を記せば、綱町運動場の入口には國旗と塾旗を交叉し、道場正面の床の間には修身要領の大幅を掛け、蒼勁なる松の大木を飾り、其前を來賓席となし萬端の用意を整へた。午後一時、先づ塾生同志にて三級を大將とする紅白勝負を以て大會を開始し、右終つて三時より、來賓對塾生の壯快なる三本勝負に移つた。

(段 外)

(一) ×	藤井長啓(輪)	(五) × ○	山田毅一(外)	(九) ○ ○	城臺近道(東)
	伊庭謙造	○ × ○	水島左造	(九)	柳井松祐
(二)	山内勝次(附)	○ ○	横島忠三郎(青)	(一) ○ ○	米林耕作(獨)
	清水邦雄	(六)	千葉強三	(二) ○ ○	永瀧松之輔
(三)	安達士門(講)	(七) ×	島田慈秀(日)	(二) ×	會木清
	松尾恒四郎		古川甚一	(二) ○ ○	土屋安
(四) ○ ○	關口垣(講)	(八) ×	佐藤傳(講)	(二) ○ ○	豊田俊章(講)
	齋藤衛平		松村松之助	(二) ○ ○	堺泰吉

(一三) 加藤大一郎(高)  
作川信二郎

(青木部長の挨拶)

(初 段)

(一四) 中野正三(講)  
河西葦平

(一五) 山本瀧平(講)  
谷岡謙

(一六) x 徳三實(講)  
石渡泰三郎

(一七) 小島松太郎(大)  
窪田松太郎

(一八) 村山邦夫(師)  
近藤謙治

(一九) 藤田義信(商)  
大野慶三郎(早)

(二〇) 稻川三郎(講)  
小倉丹治

(二 段)

(二一) 神江恒雄(師)  
塚本太作

(二二) 川勝庸吉(商)  
中野榮三郎

(二三) 片山國幸(大)  
平賀恒次郎

『右の中(五)水島對外國語學校の山田は、水島は技に於て優り、山田は體と力に於て勝つてゐた。水島合業にて一本取つたが息切れし、山田の大外刈に取返へされて引分となつた。(七)日蓮宗大學の島田と云へば人も知る大兵大力、されど古川は技、力、兼備の豪の者なれば、容易に勝負付かず、雙方勝を急いで戦ふ様、實に猛烈を極めた。(一〇)永瀧は、必勝の念切なりし爲め、却つて敵の乗する所となつて收れ、(一二)堺此の日の不覺は、ボートの然らしむる處、足腰の定まらざるに元氣に任せて勝負に出たのであつた。その對手の豊田は巧者といふ程ではないが、強いことは慥かであつた。(一

三) 作川對加藤、加藤も一高無段者の大將なれば、定めし大勝負ならんと思ひしに、作川はその獯猛にして電光の如き左跳腰にて美事に加藤を跳ね飛ばし、更に左足拂にて頭打つ程投げつけ、久しぶりに元氣を見せた。

「こゝで青木部長は立つて五十年祭の主旨を述べ、來賓に對する挨拶をなし、續いて有段者の勝負に移つた。

『此勝負中、(一六)石渡對講道館の徳は、初段中豪の者の取組なれば、觀衆も片唾を呑んで見てありしが、徳の大力は能く石渡の跳腰を避け、石渡の巧妙又能く徳をしてその大力を用ひしめず、十五分が間戰つて遂に勝負見えず、引分けとなつたが、これは初段中第一の勝負であつた。(一九)藤田對大野は、藤田少しく引け氣味にて常に受身に立ち、遂に跳腰返しにて敗れた。(二二)塚本と神江、塚本弱きにあらず、全くの注文負けであつた。神江は十年來九州熊本にて先生大家と敬せられしだけありて、老巧の取手であつたから、塚本の右を避け逃けると見せての釣込腰は、實に見上げたものであつた。(二三)は中野對高商の大將軍川勝庸吉の顔合せ、當日一の好取組であつた。中野は昨秋各學校の大會に出陣して、一度も敗れたることなき、天晴れの若武者、又一方の川勝は一高對高商の勝負にて大に名を揚げ、體量廿貫、身長五尺九寸に餘る筋骨偉大の勇士であつたから、非常なる人氣を以て迎へられた。中野は卷込と釣込腰にて攻むれば、川勝も亦大形の右跳腰にて之に應じ、恰も兩虎の如く闘ふ中、川勝さらば膝車にてと仕掛け來るを、中野腰を下して突進し、川勝の體前に流れしと見えしが、中野の鋭眼何條之を逃すべき、直に右隅に浮かして釣込腰に出で、見事に強敵を打倒したるは近頃の大勝負であつた。(二三)平賀對片山、是又柔道界の呼物、片山は大學にては勿論のこと、大兵多き柔道界に在りても第一の大男子、身長五尺九寸、體量廿五貫を有し、色黒く鐵線の如き毛は、胸と云はず腰と云はず、藪蚊の育たんばかりに生え、而もその技は頗る要領を得て物凄き程猛烈である。此の強敵を引受けたる平賀二段は、身長五尺六寸、體量十七貫、先づ大兵の中なれど、殊に童顔花の如き若武者なれば、片山が前には戰鬪艦に對する驅逐艦の如く其差甚だし。されど平賀驅逐艦の攻撃は、能く巨艦片山を凹ませべき力ありて、大外刈、絞、逆と速射砲を連發すれば、機を見て打ち出す

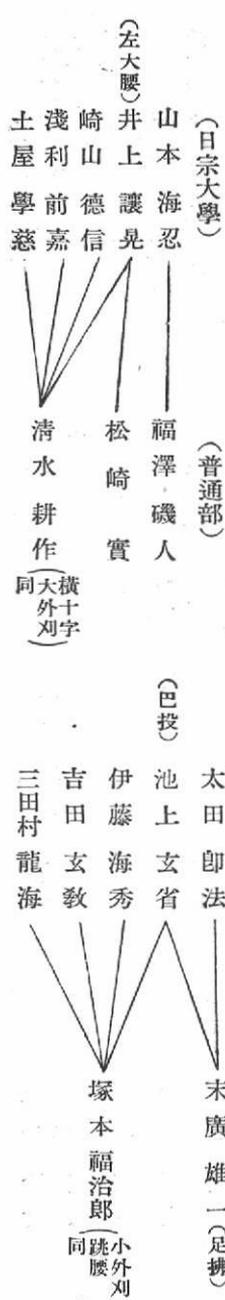
片山の太々的十二珊跳腰の砲撃も、何等の手應へなく、却て後袈に絞めつけられしが、腕滑べりて惜くも極らず、結局引分となれるは、近來になき力の入りたる激戦であつた。』

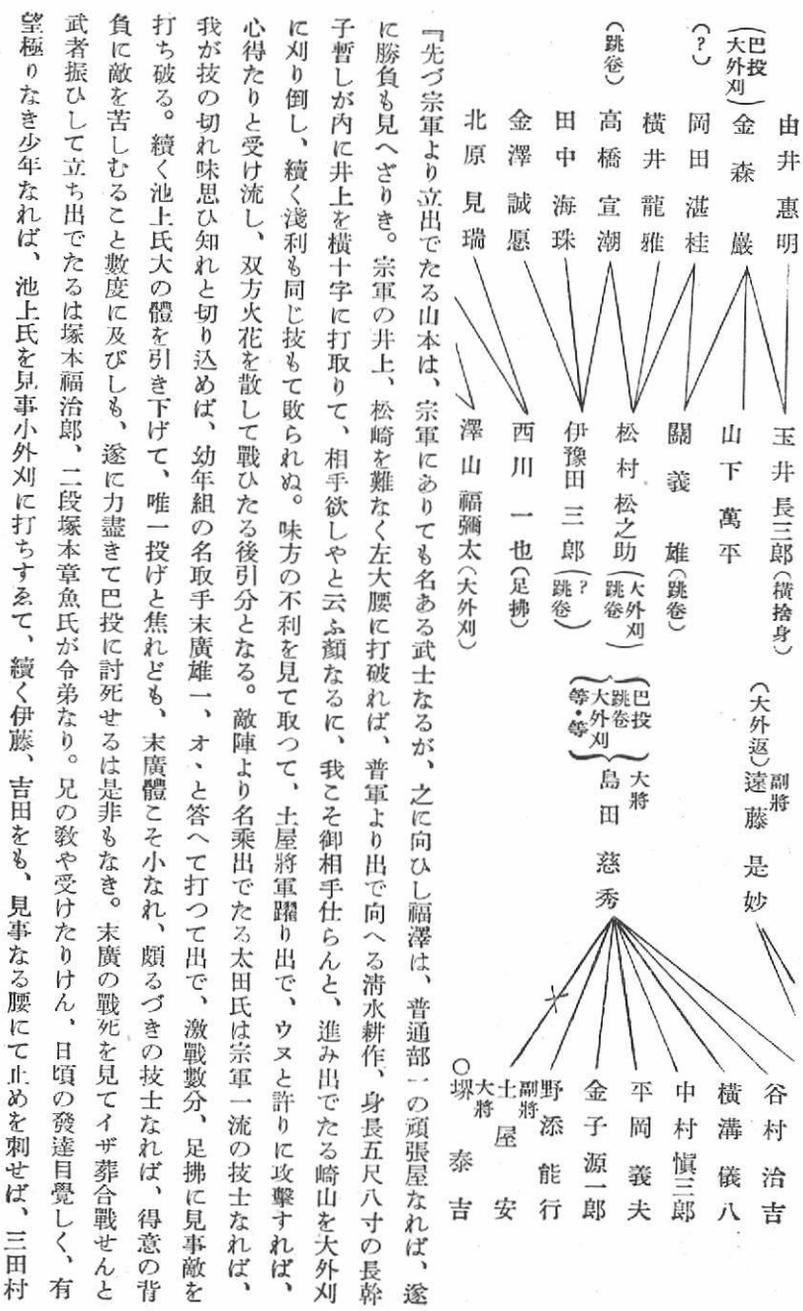
勝負後俱樂部に於て、來賓諸氏に夕食を饗し、右終りて青木部長を始め先輩諸氏と部員一同食卓を共にし、それより茶話會を開き、柔道部の萬歳を三唱して散會したるは十時であつた。

### (三) 日蓮宗大學對普通部試合

天高く馬肥ゆるの好季節、中學柔道界の重鎮たる我が普通部選手の意氣頗る盛にして、相手欲しやと思ふ折しも、恰も好し日蓮宗大學は、飯塚師範の指導の下に柔道に精進し、都下に於て一方の堅壘を誇るもの、普通部とは所謂相弟子の間柄なれば、交渉技に調ひて、十月十九日綱町道場に於て對校試合を舉行することゝなつた。

日宗方は何れも血氣の壯者なるに引替へ、普通部方は多くは年少者揃ひであつて、一見體格に於て懸隔ありたれども、柔よく剛を制するの戰場なれば、勝敗の數は豫め容易に知るべからずであつた。彼我の應援は手に汗を握りて待つ間程なく、午後一時四十分といふに飯塚師範の審判の下に試合は開始された。その經過左の如し。





「先づ宗軍より立出でたる山本は、宗軍にありても名ある武士なるが、之に向ひし福澤は、普通部一の頑張屋なれば、遂に勝負も見へざりき。宗軍の井上、松崎を難なく左大腰に打破れば、普軍より出で向へる清水耕作、身長五尺八寸の長幹に刈り倒し、續く淺利も同じ技もて敗られぬ。味方の不利を見て取つて、土屋將軍躍り出で、ウヌと許りに攻撃すれば、心得たりと受け流し、双方火花を散して戦ひたる後引分となる。敵陣より名乗出でたる太田氏は宗軍一流の技士なれば、我が技の切れ味思ひ知れと切り込めば、幼年組の名取手末廣雄一、オ、と答へて打つて出で、激戦數分、足拂に見事敵を打ち破る。續く池上氏大の體を引き下げて、唯一投げと焦れども、末廣體こそ小なれ、頗るづきの技士なれば、得意の背負に敵を苦しむること數度に及びしも、遂に力盡きて巴投に討死せるは是非もなき。末廣の戦死を見てイザ葬合戦せんと武者振ひして立ち出でたるは塚本福治郎、二段塚本章魚氏が令弟なり。兄の教や受けたりけん、日頃の發達目覺しく、有望極りなき少年なれば、池上氏を見事小外刈に打ちすゑて、續く伊藤、吉田をも、見事なる腰にて止めを刺せば、三田村

は齒がみをなしたつ、汝青二才と飛びかゝるを、塚本體を開きて柔にうけ、龍虎の争も斯くやと許りの戦なりしが、勝負は見えず、右と左に分れしは、氣合の入りたる試合なりき。さるにても塚本が今日の働き振、勇ましなど云ふ許りなく、敵も味方も稱しける。勝に乗つたる普軍の一將玉井長三郎は、之れ亦有望の取手にて、難なく由井を横捨身、微塵になれと投げ飛し、續いて金森をもと息まけど、彼方もさるもの、巴投げにて打つて出づれば、玉井は飛んで後にあり。我こそは猿面冠者山下萬平なりと名乗り出づるを、左大外に首をかき、關の義雄にと攻めかゝる。鋭鋒容易に當り難ければ、關は右に左と鋭を避け、如何なる隙を見出しけん、打ち出したる跳卷に、金森飛んで打倒る。岡田は關を打ち取れば、よき敵こそと松村は、大外刈に之を投げ、横井も右の跳卷に、戦場の露と消えにけり。續く高橋は宗軍の中堅なれば、猛り狂ふ松村を、右跳卷にとつて投げ、伊豫田をもと締めつけ絞めつけ、既に危く見えたが、惜き所にて勝を伊豫田に譲る。伊豫田は之に勢を得て、田中を右跳卷に跳ね飛ばし、金澤ととつくんだり。金澤此處を先途と猛襲すれば、伊豫田左右に身を轉じ、勝敗いつかな定まらず、涙をのんで別れる。普軍の勢當り難く、未だ半にも達せざるに、宗軍は早や高橋、金澤の諸將を失ひ、残るは唯三人のみ。

「敵將島田將軍は北原、遠藤の二將を近く召し、我此度の戦は、堺將軍を追ひつめて、親しく雌雄を決せんと、來りて見れば此有様、汝等出でて敵の雜兵共を追拂ひ、全滅なすにあらざれば、再び會はじ歸るなと、別れの盃なしたるか否かは知らねども、宗軍の四天王北原見瑞、雷聲の如き應援に送られて、立ち出でたるこそ雄々しけれ。之に双向ふ西川は、幼年育ちの若武者にて、花も實もある勇士なれば、我劣らずと戦ひける。北原己が責任を感じ過ぎ堅くなりたる一刹那、西川の打ち出したる足拂、見事極つて無念と許り、戦友の後を追ひにけり。遠藤是妙大に怒り、西川を大外返に打ち破れば見るから強さうな澤山福彌太、我こそは柔道狂と綽名さる、土佐の住人福彌太なりと名乗り出でたる權幕に、遠藤少しく恐れてか、大外刈の晴業に、火の出る様に投げられたり。敵將島田將軍は、味方の不甲斐なきに怒をなし、銅鑼の如き音

聲揚げ、イザ來れ雜兵共、多年鍛へし此腕受止めて見よと、荒れ出でざる有様は、重量二十二貫に餘り、色飽まで黒き大男なれば、仁王の怒れるにさも似たり。澤山は大將を打ち取るこそ願ふてもなき幸なれと、滅多矢鱈に攻めかゝれば、敵陣少しく亂れたり。時分は好しと澤山が、打ち出したる立紋に、あはやと思ふ危さを、流石に見事に残しつゝ却て巴投に澤山が首をぞかきにける。續く谷村、横溝、中村、平岡、金子、野添の諸士全力盡して戦へど、巴、跳卷、大外に、哀れ一つ枕に伏したるは、餘りと云へば腑甲斐なし。副將土屋將軍は、敵將如何に強くとも、何程の事やあるべきと、跳腰に打つて出づ。島田は猪口才なりと打ち拂ひ、秘術を盡して戦ふ中、土屋如何なる隙をや見出しけん、思ひ切つたる足拂、敵に深手を負せし時、島田は腰部に痛を覺へて、暫し回復を待ちけるが、數分の後再び出で、奮戦すれど、何れを勝とも知れざる内、早や引分の時は來にければ、審判官は二分の猶豫をなし。勝負定まらずば、先の土屋の足拂を一本となすべしと宣告したり。之を聞きたる島田將軍、今は之れ迄なりと思ひげん、決心面に現はれて、勢こんで攻めかゝる。電光石火、獅子奮迅、勇ましき事の限りなれど、勝負は遂に見えずして、土屋の勝となりければ、普軍の應援勇ましく、勝鬨どつと揚げにけり。

『此日の合戦は、宗軍初より浮足立ち、敗戦の續けるに、遠藤、北原、金澤の諸將思はぬ不覺をとりけるが、大將軍島田出づるに及び、勝ち誇りたる普軍の諸將を、一瀉千里の勢に打ち捨てたる功蹟は、後の世までも輝かん。戦遂に敗るれど宗軍以て瞑すべし。』

『試合終つて、五時、兩軍とも俱樂部西洋館に會して、懇親茶話會を開く。先の敵は今の味方、互に友情を温めつゝ、又明年をぞ期しにける。』(多幸生)

## (四) 月次勝負

秋風暑からず寒からず、誠に柔道の好時節なる十月二十日の午後二時、前項の對外戦に於て勝を制したる勢を以つて、無級者有級者の月次勝負が開かれた。日頃鍛へた得意の業に腕を撫したる面々は、名譽の鼻を高めんと皆勇ましく奮戦した。技には無級者の分を略して、有級者の取組丈けを掲げて置く。

- |   |   |  |
|---|---|--|
| <p>(一) 〇〇〇 二階堂貞吉 (袈裟固)<br/>大外刈</p> <p>吳 韶 笙</p> | <p>(七) 〇〇〇 松田新三郎 (合業)<br/>足車</p> <p>倉成龍之助</p> | <p>(一三) 〇〇〇 山縣彌兵衛 (大外刈)<br/>同</p> <p>岡 西 一 夫</p>   |
| <p>(二) 〇 二階堂貞吉</p> <p>泉 竹次郎 (袈裟固)</p>           | <p>(八) × 松田新三郎</p> <p>小柳雄四郎</p>               | <p>(一四) 〇〇 山縣彌兵衛 (大外刈)<br/>足拂</p> <p>井上邦治</p>      |
| <p>(三) × 泉 竹次郎</p> <p>岩 淵 英 治</p>               | <p>(九) 〇 小柳雄四郎</p> <p>香月四郎 (袈裟固)</p>          | <p>(一五) 〇 山縣彌兵衛 (大外刈)<br/>返</p> <p>中野 熙 治 (足拂)</p> |
| <p>(四) 〇 岩 淵 英 治</p> <p>松 下 義 光 (袈裟固)</p>       | <p>(一〇) 〇 倉成龍之助</p> <p>岩 田 虎 夫 (足拂)</p>       | <p>(一六) × 岡 西 一 夫</p> <p>澤 田 霞</p>                 |
| <p>(五) 〇 松 下 義 光</p> <p>松田新三郎 (足拂)</p>          | <p>(一一) 〇〇 香月四郎 (體落)<br/>絞</p> <p>堀 俊 雄</p>   | <p>(一七) 〇 中野 熙 治</p> <p>三 好 亥 郎 (足拂)<br/>同</p>     |
| <p>(六) 〇〇 松田新三郎 (足拂)<br/>背負投</p> <p>岩 田 虎 夫</p> | <p>(一二) 〇〇 香月四郎</p> <p>山縣彌兵衛 (大外刈)<br/>返</p>  | <p>(一八) × 澤 田 霞</p> <p>井上邦治</p>                    |

(一九) 三好亥郎 (袈裟固)

高橋藤三郎

(二七) 關慶茂 (背負投)

稻葉

(二〇) 三好亥郎 (大外刈返)

金子助一郎

(二八) 海東要造 (袈裟固)

龍岡榮

(二一) 三好亥郎 (大外刈)

清水耕作 (内股)

(二九) 龍岡榮 (背負投合業)

松野和夫 (背負投)

(二二) 金子助一郎 (大外刈)

高橋藤三郎

(三〇) 松野和夫 (背負投)

中村龍藏 (跳腰)

(二三) 清水耕作 (四方固)

阪本信吉

(三一) 松野和夫 (襟絞)

關義雄

(二四) 清水耕作 (跳腰)

稻葉茂

(三二) 關義雄 (大外刈)

小林威雄

(二五) 清水耕作 (巴投)

關慶

(三三) 關義雄 (袈裟固)

福士吉雄 (跳腰)

(二六) 清水耕作 (袈裟固)

海東要造 (同)

(三四) 福士吉雄 (跳腰)

五月女光三

(三五) 福士吉雄 (袈裟固)

金田政治

(三六) 金田政治 (袈裟固)

高橋順之助 (四方固)

(三七) 高橋順之助 (袈裟固)

峯岸鎮治

(三八) 峯岸鎮治 (同)

小西哲二 (跳腰)

(三九) 湯村藤助 (四方固)

小西哲二

(四〇) 水島左造 (袈裟固)

水島左造 (同)

(四一) 水島左造 (合業)

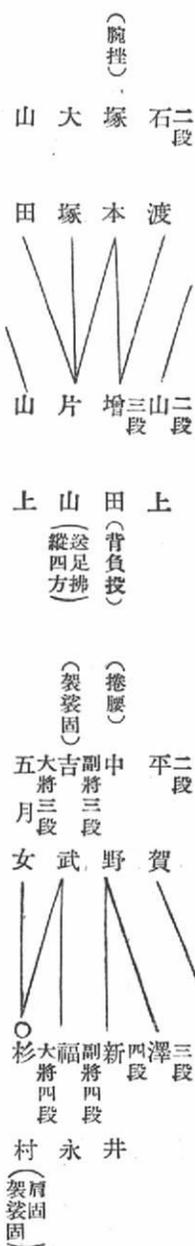
小原善次郎 (背負投)

(四二) 小原善次郎 (送襟絞)

清水邦雄 (大外刈)

(五) 對東京帝大柔道大試合





試合の経過

(十一月二十五日時事新報所載)

定刻に至り、佐村審判威儀を正して立てば、満場鳴りを靜めて待つ間程もなく、悠々として現れしは鈴木と井上(帝大)なり、鈴木の内股極つたと思ひの外掛け返へされ、續いて攻むる押込み亦外れて引分となる。柳井對品川、古川對正力共に段外にありて有數の選手、互に秘術を盡したるも、各々意の如くならず引分けたれば、初段佐々木に對して帝大側より、野球に其人ありと知られたる初段三島出づ。三島屢々虚を衝きて有望に見受けしも、佐々木もさる者容易にその手に乗らず、遂に引分となつたが、頗る見堪えのあつた勝負であつた。作川は新進の勇士、立つや否や見事の跳腰にて帝大の菅原を破る。代つて出でたる中村は、油斷ならずと意を配り、搦み會ひしが、僅かの隙を見出したる作川が、中村の出足を了と拂つての勝はこれ亦眼覺ましかつた。帝大の吉田は、物々しき振舞よと、勝に乗ざる作川を拂腰にて破り、窪田出でしも、常に守勢に立ちて業を示さざる内引分に終つた。谷岡水際立ちたる大外刈に吉武(帝大)を打ち据ゑ、一息吐く矢先、得意の早業を有する本田足拂にて谷岡を退かしめ、續く盛田も釣込足にて果敢なき最後を遂げければ、塾方より塚出でて慎重に本田に對し、戦ひ數合の後引分となりしは、殊に見榮えある働き振りよと感ぜられた。次は小野と柳生、小野は柳生を青くなる程送襟に參らせしも、大兵の阿部の爲に袈裟固に破られ、瀬良が咄嗟の送襟に阿部亦假死に落ち、此に帝大側より二段越川出で、瀬良の懸命なる攻守もその甲斐なくて引分に終り、これより愈々双方二段の試合に入る。

塾の二段の先鋒早川に對して帝大の山上(兄)出で、互に大事を取り過ぎて業もなく引分となれば、近來めきくと腕を上げたる石渡、如何なる奇襲を試みんかと思はれしが、之に對して帝大よりは三段の増田現はれ、石渡に業ありしも、増田の水際立ちたる背負投極つて、惜しくも之に勝を讓る。此時より審判は嘉納師範となる。勇邁なる塚本出でて増田を逆の腕挫に倒せば、帝大にその人ありと知られた大兵肥滿の片山現れて場を壓する思ひあり。塚本送足拂に退けば、小兵ながらも妙技に富める大塚、雲衝くばかりの片山と相對す。さしもの片山も大塚が堅實なる態度に勝敗容易に定め難かりしも、遂に縦四方固に片山の勝となる。山田代つて巧に戦ひしも引分に終り、平賀と帝大の山上(弟)、極めて活氣あり、雌雄遽に決せずしてこれ亦引分となる。三將中野二段は帝大に堅實果敢の稱ある澤三段に向ふ。中野寸隙に乗じての捲腰鮮かに極り、流石の澤も引き退けば、四段の新井現れたり。新井は一高に在りし頃より、奇計に富める勇士なれば、これぞ當日の見物なるべしと、皆片唾を呑んで見てあれば、早くも中野に業あり、新井ナンノと堪えて進む途端、その腕中野の體に當りて痛み分、新井も自ら快よく退いた。中野にして若し負傷の厄なれば、勢に乗じて新井に肉薄すべく、新井亦特有の神出鬼没の妙手を以つて激しく戦ひたるならんに、斯かる結果に終つたのは如何にも残り惜かつた。さては愈々副將同士の勝負となり、氣を以て勝てる吉武三段は、落着きたる態度の福永四段(帝大)と、兩虎の如く戰場に相對す。吉武無二無三に攻め立て、福永を袈裟固に破れば、帝大の大將杉村現はる。杉村は寢業に巧妙なる人、吉武其裏を搔かんとせしも、杉村は名高き勇將とて、忽ち吉武を組み伏せての肩固に、流石の吉武も遂に敗れた。こゝに愈々最後の大将同士となりたるが、勝敗の決は此の一戦に懸りて存するのである。五月女奇麗な技をと望めるに、咄嗟の間杉村が得意の寢業は又しても五月女の不利益となり、防ぎに防ぎしも遂に力盡き、我が軍は可惜榮冠を逸したのであつた。

嘉納師範の訓辭ありて後、双方とも萬歳を三唱し、賞牌の授與を以つてこの大會を閉ぢたのは六時頃であつた。此の日英國大使マクドナルド氏は二名の紳士と共に來臨、其他多數の來賓ありて極めて盛會であつた。(口繪參照)

尚水仙花生の筆に成れる此の試合の感想と、吉武君の當時の思出とを掲げて、右記事の足らざる所を補ふこととする。  
 一は水仙花生がその頃書いたものであり、二は吉武君が此度部史に寄せられたものである。

## (六) 慶帝試合雜感

(水 仙 花)

○三田の健兒が加茂川の流を増した恨みの泪は、最早彼れ是れ一句の昔となりさうだ。爾來感情の強い荒くれ男が、雪の朝、風の夕に鍛へに鍊へた腕の力は、見事早稻田と連戦して連勝、遂には敵の逃ぐるに及んで、敢て之を追はんともせず、空しく腕を撫して明治も四十年とはなつたが、恰も好し雲の如く林の如く有段者を擁立せる、東京帝大と戦機熟し、山邊も野邊も黄金し來て、糧は足り、馬肥ゆる秋の日に、兩軍の精兵本郷の丘に相見えたのである。

○三田の軍は敵の老将を見事薙ぎ倒して、少くとも大將と副將の生還を期すれば、本郷軍も敵の弱少輩何物ぞ、鎧の袖の一觸に打亂して、源水新井四段以上三名を殘さんと誓つて居たといふことである。此日の戦の花々しかりしは、蓋し由る所があつたのだ。

○最も痛快であつたのは、平賀と山上の勝負である。山上は一高が高商と軍を大塚に交へた時、雷名を轟かした勇將である。其歴史と其氣象とは、平賀の敵として恥かしくない。平賀は飽までも負嫌ひである。男性的の氣象を充分に具備して居るのである。山上は三段平賀は二段である。立合つた、山上は堅にして實、平賀は豪にして壯である。平賀は懐が深くて廣い、始終敵を壓迫して居る。山上は體軀が少し劣つて居る、始終腰を引いて逃げて居る。平賀は横捨身で九分九厘まで業を取つたのである、其他にも業があつた。山上は時々思ひ出した様に、小外刈の様なものを試みるが、平賀はどこ

を風が吹くかといふ風である。本郷側は水を打つた様に静かなれば、三田側は片唾を呑んで汗を握て眼は輝いて居る。十五分は過ぎた。暫くして嘉納審判三分猶豫の宣告を發した。横捨身をやる、跳腰をやる、釣込まんとする、膝車を試す、皆極まらぬ。龍攘虎搏といふ形容詞は此の場合に使つたら間違はなからう。更に二分猶豫された。山上は此處ぞと懸命に腰を下げて居る。平賀は苛つて攻め立てる。審判者は先の業があるから軽くとも取るといひ、五十秒更に猶豫された。之で猶豫は三度目である。氣は勝つて居ても、體は疲れて来る。終に引分の宣告は下つた。戦ふこと二十有三分。本郷側はア、よかつた、三田側はオヤノ。

○次に惜かつたのは、中野榮三郎と新井源水。この戦に中野が過つて當身を喰つて痛分となつた事である。敵の最も恐怖の念を抱いて居たのは中野である。三田の軍でも中野は中堅であつたのだ。

○最も残念に思ふのは、三田の副將吉武が、敵の總大將杉村に出るや否や押へられたことである。假令其前に敵の副將福永と十七分間闘つたと云つても、未だく／＼立てば容易く杉村に引けは取らぬ吉武であつたのだ。流石は大將だけに敵の策戦が圖に當つたのだ。福永が四段、杉村が四段、吉武は三段だからね。段からいふと上出来だが、斯ういふ場合隨分惜し。

○會場の取締は塾からも委員が行つて之をなしたが、帝大の方では用度係や制服姿の小使總出で、場の内外をよく取締つて居たのは嘉すべきことだ。

○勝負後學生集會所に於て茶話會あり、吉武が三田を代表して別れの辭を述べた時、坐ろに何んだか變な氣持がした。

○外へ出てから猛烈に塾歌を合唱したので聞いて、帝大の戰士は三田軍の勇氣に舌を卷いたと云ふことであるが、三田では永劫此關係を續ける積りであるのだから、一度の敗けはさして残念とも思はぬ。

○帝大では後援會といふものがあつたが、塾にはなかつた。

○兎に角あんな三段四段の連中が、十人餘も加はつての勝負は、本家本元の講道館でも見られぬ大なるものである。

○仕合後嘉納師範が満面に喜悅を湛へて、今後此の兩校益々相親んで今日の様な奇麗な、見事な、實に模範的な仕合を繼續せられんことを希望する。今日の如き好結果を收め得たことは、實に兩校の名譽であると挨拶されたのは、此の試合を評價するに最もよい禮讃である。

## (七) 對 帝 大 試 合

當 時 の 思 出

吉 武 吉 雄

明治三十八年中村愛作君、佐野甚之助君等卒業後は、中野榮三郎、平賀恒次郎、石渡泰三郎、塚本太作、山田又司の諸君が、益々強味を加へ、二段ではあつたが實力は三段のバリ／＼であつた。然し大將たるべき湯本君は、胃腸を悪くしたりして、餘り元氣がない。僕も八〇%位の元氣であつたが、前記の連中は帝大に四段が三人、三段が四人居ても、湯本君をば決して出さぬから、是非やらうと云ふ強い主張であり、僕も連中の元氣と強味を考ふれば、決して負けぬ、萬一負けると來年は必ず勝つ、此邊で一度負けて置く事は、部員にとつて將來益々強くなり、團結する最上の手段だと考へた。青木部長も飯塚師範も大乘氣、唯心配して居るのは先輩で、兎も駄目だと云ふ意見が多かつた。當時米國ハーバード大學在學中の中村愛作君に此の企を通知したら、それは餘り猪突だ、大に自重せよと云ふ返事が來た位であつた。

當時官立學校殊に帝大の選手は、夫れ相當に順序よく昇段したが、塾は彼等に比し昇段が遅れて居つた。之れは講道館に官學偏重の氣分があつた爲でもあつたが、塾では元々段等眼中になく、寧ろ二段で三段の、三段で四段の、實力ある事

を得意として居つたので、選手は段こそ劣るが決して負けぬ自信があつた。

愈々人数及び口取の相談となると、帝大は有段者が五十人も居るくせに、選手数二十人中に、無段者も是非三人加へたいと主張した。塾は之れを承知した。又現在使用せられてゐる長筒袖の柔道衣、あれは元と袖口が上腕までしかなかつたのが、洋服が流行り出すと共に長くなつたのであるが、塾ではそれを着て、總て模範的な勝負をやらうといふ意向であつた。所が帝大側では、始めは之に不賛成であつたが、嘉納先生などの意見もあつて、結局それで試合をすることになつた。長筒袖の柔道衣が普く着用されるに至つたのは、その時からのことである。又その時頃から、股引も下まで長いものになつた。

さて帝大では、七高出身で飛切り強いと云ふ井上を先鋒に出して、之れに無段者を皆抜かせ、萬一駄目の時は、同じ位の次の品川迄で抜き切らせて、岡山出身逆の名人（當時での）、現讀賣新聞社長正力君をして有段者に食い込ませ、逆で四五人も抜かせて、大勢を決する策戦であつたので、無段者三人を特に主張した。然し三田にも、投げられぬ事では三段の力ありと稱する、鐵ちやん事鈴木鐵太郎君が健在であり、柳井松祐君が力の出盛りであるし、蠻力を有する古川甚一君も共に一級に居つたので平氣で引受けた。

先鋒同志の戦が愈々始まつたが、井上將軍少しも勝味なく、鐵ちやんに業有りを取られて引分。試合後兩人便所に落合ひ、井上君が、君は實に強いなあと感心する。鐵ちやんはへへ……と笑ふ。次も引分で、其次の正力君は成程逆は上手で古川君は腕逆を取られたが、其儘引上げてドシンドシンと衝突するので、正力君も齒が立たないで引分けた。有段者での策戦の中心は、石渡君を如何に使うかであつて、敵の中堅片山國幸（現醫博）二十三貫五尺九寸に石渡君が當る様に配置した。石渡君は増田二段を出すボン式に軽く足拂で倒したが、業有りであつた。其直後一寸の油断で、背負の様な釣込腰で軽く落されて、片山君の一つ手前で落命した。之が三田軍の策戦に非常の狂ひを生じ、大男の片山君に小男の塚本

大塚兩君がやられ、殊に大塚君は向固めでやられたが、まるで大塚君の體が見へなかつた。大塚君は五尺一寸、十三貫であつたのだ。三段の山上君が二段の平賀君に對し、まるで防戦一方でぶら下がつて居つたのは滑稽で、嘉納先生は紅（三田軍）は白に膝を付かすれば一本取ると迄云はれたが、遂に引分けた。中野二段が敵の澤三段を、大外刈から巻込んで、ウンと云ふ程投げ付け四段の新井源水君と引組んだのは壯觀で、痛分けとなつたが、之れは規定によつて止むを得なかつた。此邊は最も殺氣を帯びたクライマックスであつた。敵の副將福永四段は、左跳腰一方で四段になつたと云はれた程の人であるから、左跳腰は正に利くが、當時僕は、右跳腰には弱いが左には大丈夫だつたから、立つて攻めると主張したが湯本大將は之を絶對に許さず、福永は左跳腰以外恐るゝに足らず、君の寝業を以てすれば何でもない故、押へ込みで行けと嚴命するので、たうとう寝業一方で攻め袈裟固にて勝つたが、寝業のみで攻めると云ふ様な勝負をした事がないので、やつて居ながら何となく心苦しく氣の毒な感じがした。福永君は不満らしい顔をして居つたが、今でも彼の時の事を思ふと大將の命令とは云へ、イヤナ氣持がする。杉村君にやられたのは、自分の策戦を向ふに使はれて、首固めにやられた。福永君との戦が長かつたので、疲労もして居つたが、今から思ふと少しアガツテ居つた點があつた。此勝負は毎年やる約束で、紀念メダルには第一回試合と刻んだが、次年は先方でウヤムヤに斷つて來て駄目になつたが、それから三田は非常に強くなり、湯本君の犠牲的出陣が、次年には正に偉大なる結果を生んだ。

外敵に敗れたる後の三田柔道部は、必ず次年には強くなるのが、今迄の歴史であるが、今後萬一、此の負を轉じて勝に導く歴史的の力を失ふ時があれば、それこそ非常なる不祥事として、最大の警戒を要する秋であらう。

塾は三高に破れて斷然強くなり、帝大に破れて平賀、中野、石渡、塚本の三田の四天王時代を出現し、高師に破れて中野森藏君を生み、不統一的の關西遠征に破れて、次年の大關西遠征となり、阿部兄弟出現の基礎を築いた。而して其後早大と豫科同志の試合をして二敗一勝したが、現在は何に向つて備へを堅うしつゝあるや。切に現部員の活躍を祈る。

(八) 雜記

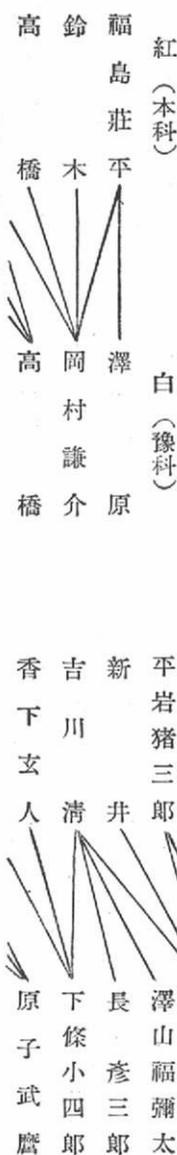
本科對豫科大紅白勝負

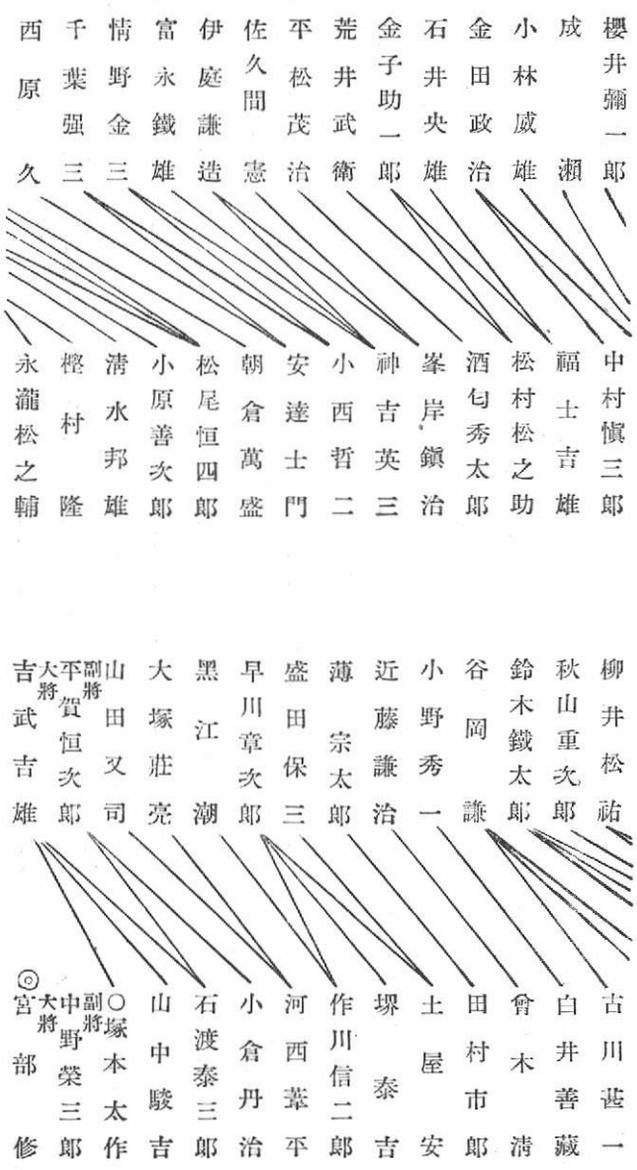
『我が柔道部が都下に覇を唱ふること茲に數年、一度は早稻田と戦つて顔色なからしめ、二度は四人の不戰勝者を殘して殆ど起つ能はざるまでの打撃を彼に與へてより、我が部の隆盛日に月に昌にして、今や二十三人の有段者、七十有餘の有級者、三百の部員を有するに至りしこそ實に天下の偉觀である。』

『斯も盛なる我が柔道部は、本科對豫科大試合の名の下に、一つには部員の士氣を鼓舞し、又一つには平素稽古し得たる技倆の程を示さんとて、五月十一日午後一時より一大紅白勝負を道場に舉行した。豫科生は斯道の後進者であつて、常に本科生の教を受けてゐたものであるが、近來著しく上達して既に多數の有級者有段者を出し、意氣頗る盛にして、本科生の技倆何程かあらんと、健氣にも先進に向つて挑戦したれば、本科生いかで應ぜざるべき、直に快諾して晴れの勝負が行はるゝことゝなつた。戦ふものは是れ新進氣鋭の豫科軍と、老巧細心の本科軍、兩軍の勢力伯仲の間において、勝負素より豫め知るべからずであつた。されば兩軍の應援隊は、互に好位置を選びて之に陣し、參觀者亦頗る多くして、さしにも廣き武勇道場も立錫の餘地だになき程であつた。』

紅 (本科)

白 (豫科)





「本科勢の先陣を承はりしは福島莊平とて、知る人ぞ知る、兩毛の地に田舎初段の譽も高き強の者、之に向ひし澤原は、剛力無雙の取手なれど、小内刈にて敗れしは是非もなし。豫科軍より躍り出でたる岡村謙介、ウヌと許りに得意の背負にて投げ棄てたるぞ美事なる。續いて來る鈴木、高橋共に同じ枕に伏しにけり。猛りに猛る岡村を、平岩將軍取つて絞め、入り代りたる高橋は、品川警察に鍊へし腕冴えて、平岩、新井を投げ飛ばし、吉川迄もと勇めども、敵もさるもの、足拂

にて打ち止めたるは手柄なり。續く福彌太澤山の奮戦も、長の巧妙も、唯吉川が自慢の種となりしのみ。猪口才なりと打つて出でたる下條の小四郎、疲れし敵を足拂にて物の見事に取つて投げ、西藏山人と渾名ある香下玄人をも、大外返に打ち据えてホツと一息。その間もなく吾れこそは櫻井彌一郎とて、其名も高き野球の親分と名乗り出たる長幹子、唯一握りとあせれども、小四郎右に左に之を避け、遂に勝負も見えざりけり。本科軍より立ち出でたるは成瀬とて、昔とつたる杵柄に、双向ふ丈夫は原子とて道場一の熱心家、原子の前には敵とてなく、成瀬、小林も物の數かは、忽ちの中に退けられて動搖めく中より金田政治、體落に原子を破り、幼年育ちの中村と引分をぞ取つたりける。茲に豫科軍より二代目平賀と稱さる、福士吉雄出でて戦ひ、石井の首を搔きたるに、金子の爲に袈裟固められ、熱心なる松村松之助腰投にて其仇を報い、昔鳴らせし荒井武衛と引分けぬ。酒匂、平松は無能に終り。メツキリ強くなりたる峯岸鎮治向岡に佐久間を仆し、伊庭に讐をば取られけり。之に連なる英三神吉、山も荒れよと奮戦して、伊庭、富永の大敵を手玉に取りし勳は、敵も味方も稱へける。さる程に本科軍より出でし大兵肥滿の情野氏は、辛くも彼をば取つて締め、小西は情野を打破り、千葉は小西を投げ棄つれば、名から強さうな安達士門、何なく千葉を打ちすゑて、西原將軍と痛分。勝ち誇りたる豫科軍は、ドツと鬨をぞ揚げる間を、朝倉萬盛進み出で、相手欲しやと思ふ間もなく、毛もくちやらの柳井松祐出づ。朝倉跳腰にて彼を攻むれば、柳井は背負にて之に應へ、暫時勝負も見えざりしが、おやぢの力や優りけん向固に破りける。松尾とて有望なる一勇將、柳井、秋山を打倒し、鐵の如き鈴木へと攻めかゝる。鈴木は堅固は人も知る、少しく攻撃力の加はらば、段も望まるべき好勇士、松尾と小原を手玉に取り、するき清水と分けにける。

『本科軍は茲に無段者を終り、有段者となりたれば、合戦愈々佳境に入り、兩軍の應援はその聲天にも達せん許りなり。名もなき木葉武者と立ち合ふこそ名折れなりと、谷岡將軍齒嚙をなしつ立ち出でけるが、内股にて櫻村を破り、續いて來たる幼年組の總大將永瀧松之輔の花武者をも同じ技にて討死さす。柔道を飯より好きな古川甚一、谷岡如何に健なりとも

我が練へにし腕前を、目に物見せんと戦へば、オ、と應へて谷岡も、火花を散らして戦へど、勝負は遂になかりけり。喰ひ込まれたる本科の初段、士氣をや弛めけん、小野、薄の面々も、揃ひも揃つて引分けたるは、飽き足らざりける心地ぞする。盛田勝を土屋に譲り、徒らに天狗の鼻を高からしむれば、元氣初段の早川氏、血眼になりて立ち出でたる其態度、殺氣満ちたる其有様、物凄きこと言ふばかりなし。土屋の安を得意の背負にて火の出る程に投げ放し、續く堺は剛の者なれど、大外返に戦場の露と消え果てたるぞ無念なれ。川は川でも作川信二郎、無冠の初段と吾も人も許せる元氣者として、勝潮に乗つたる早川を、左跳腰にて粉碎し、黒江城にと攻め寄する。作川の跳腰も無理なき黒江には利目なく、黒江の巧妙も作川の勇には勝を得ず、電光石火と奮鬪するも、勝負は遂に見えざりけり。さるにても作川の働き振、金鶏動章にも値つべし。豫科軍より出でたる河西葦平は、漸く初段の初めなるに、本科軍に残れるは後僅に四人、吉武大將の顔面には怒色あり。向つて出でたる大塚莊亮、汝若輩目に物見せんと戦へども、河西もさるもの、秘術を盡して應戦す。如何なる隙をや見出しけん、思ひきつたる河西が背負、敵は微塵と見えたるが、心得たりと大塚二段、ひらりと體をかはしたる早技こそ、實に彼ならでは能はぬ妙技なりけれど、第二の背負を防ぎ兼ね、遂に討死したるは武運の盡きか、過ちか。本科軍の勇將山田又司、身長五尺六寸、鐵をも欺く其腕、小兵の河西を只一打と思へども、河西の巧妙なる、剛に出づれば柔に受けとめ、火花を散らす十分餘、引分となりたる功績は、世々代々に傳ふらん。副將平賀恒次郎味方の不利を見て取つて、腐甲斐なき武者共かな、十年以來鍛へに練へし我が腕を、試さん秋は今なりと、武者振ひして立ち出でけり。之に向ふは小倉の丹治、封鎖船の任務を盡さんとて、用心堅固に防禦しければ、平賀將軍氣をいらち、四方固に破りけり。さる程に豫科より立ち出でたる若武者は、其名も高き石渡泰三郎、満面に希望の色を輝かし、組むより早く打ち出したる跳腰に、平賀は脆くも仆されて、本科勢はいよく、悲境に陥りぬ。茲に於て總大將吉武吉雄、弓矢八幡念じつゝ、味方の軍に幸あれと、決心面に現はれて、立ち向ひたるこそ雄々しけれ。石渡好き敵こそ御參なれと、奮戦最も努めしが、跳腰返と

背負の合業にて、潔くも討死したるは是非もなし。續いて向ふ山中駿吉、馬力に於ては吉武も三舍を避くる剛の者、得意の腰に攻めたつれど、吉武心得たりと受け流し、十三分の其間、龍虎の勇を競ひつゝ、何れを勝と知らま弓、吉武今は是迄なりと、袈裟固に打つて出で、遂に止を刺しにけり。吉武再度の戦に、刀は折れ、身は傷き、力盡きてぞ見えたれば、旭將軍塚本太作、吾こそ敵將射止めんものと、飛鳥の如く腕逆にと攻め寄する。策戦遂に過たず、吉武大將泣くく部下の後をぞ追ひにける。勝敗はこれ兵家の常なれど、大將副將を残して打ち破られたる本科軍の遺憾は如何ばかり、思へば哀れの極みなる。忽ち起る豫科應授隊の歡聲は、天地も振ふばかりにて、勇ましき事の限りなりけり。」（中立生）

### 幹事の更迭

明治三十五年塾に入學せる以來部員の總帥として對外戦に於て幾多の武功を樹て、又三十七年以來幹事として勞を惜まなかつた箱田達磨氏本春業を卒へ、勇邁なる平賀恒次郎氏が幹事として推選せられた。

### 近衛第三聯隊の柔道

軍隊で始めて柔道部を設けて、若い士官連中に稽古させたのは、麻布の近衛歩兵第三聯隊であり、この第三聯隊の柔道部を指導して盛ならしめたのは、我が部の師範と部員の人々であつた。

近衛三聯隊では、明治三十九年頃から柔道の稽古をやつてゐたが、初は極く微々たるものであつた。當時の聯隊長は橋本勝太郎大佐で、非常に柔道の好きな人であつた。聯隊には東久邇宮稔彦王殿下も、見習士官として御勤務あらせられた。その時同聯隊に加藤三郎といふ士官候補生が居り、同氏は飯塚先生と同郷の關係から、明治四十年に先生が懇請されて師範として招かれ、湯本氏外二三の有段者が、助手として出勤することになつた。それより同聯隊の柔道部は頗る盛になり、

數年の内には二段位迄の實力あるものが大分出た。東久邇宮殿下におかせられても、初めよりこの仲間に加はりて、稽古を勵ませられ、後には初段の實力を有せられるまでに進歩せられたるは敬服に堪へない。

斯くの如く我が柔道部と三聯隊との間に、密接なる關係が結ばれたので、塾に大會のあつた時など、東久邇宮殿下其他將校が來臨せられ、優勝者に對し屢々記念品を寄贈されたるは、無上の光榮であつた。

橋本中佐の次に來られた山田聯隊長も亦大の柔道禮讚家であつて、この聯隊長の熱心の下に、柔道が兵營化されんとする勢にまで進み、第一聯隊との間に試合が行はれたこともあつたが、その後の柴聯隊長時代に至つて漸次下火になつて行つたのは残念であつた。

## 西洋人の入門

五月初め義塾豫科英語教師モリス及びクラーク(弟)の兩氏は、我が部に稽古を願ひ出でたれば、快諾を與へ、兩人は毎日稽古に勵んでゐた。殊にクラークは體量百七十封度、身長五尺九寸ありて中々の大男であつた。

## 幼年紫組の會合

久しく開會の機を得なかつた幼年紫組の會合は、五月三十日午後五時飯塚先生の宅に於て催された。當日は五級(紫帶)以上の會合にして、紫組の名稱を幼年組と改むること、及び幼年組を紅白の二組に分ちて時々雌雄を決し、以て斯道奨勵の一助となすことなどを決議し、互に歡を盡して九時頃散會した。

越えて六月八日土曜日の午後より幼年組全體の會合を目黒の青木子別莊に催したるに、出席者は何れも末頼母數柔士の面々五十有餘名、天氣は好し、莓は熟して申分なく、何れも芝草に腰を下して飽食し、さては球投げ、或は人取りに時の

移るを忘れ、夕陽彼方の森に落ちんとする頃、名残り惜しくも柔道部幼年組の萬歳を三唱して歸途に就いた。

## 部員派遣

○九月廿九日、講道館有段者月次勝負に、二段中野榮三郎氏、初段石渡泰三郎氏、初段佐々木龍三郎氏出席。皆相當の成績を挙げ、特に石渡氏は此の日二段に昇段した。

○十月二日、外國語學校柔道大會に、二段中野榮三郎氏、同石渡泰三郎氏、初段谷岡謙氏、同堺泰吉氏、二級安達士門氏、幼年三級平岡義夫氏、同西川一也、此七名出席。中野、堺、安達、西川の四氏は勝、石渡、平岡(痛分)の二氏は引分の成績を得た。

○十月廿七日、講道館無段者月次勝負に、一級古川甚一氏、同曾木清氏、二級安達士門氏、三級松尾恒四郎氏出席。皆二三人を投げつけ、就中松尾恒四郎氏は、三級三人二級一人に勝を得た。

又同日早稲田大學創立二十五年臨時柔道大會に、初段窪田松太郎氏、一級曾木清氏、二級安達士門氏、三級野添能行氏を派遣した。

## 進級一括

○三月昇進したる者左の如し

初段へ 明石文治、谷岡謙

○五月十九日講道館春季大紅白勝負の結果昇段したる者

初段へ 作川信二郎、堺泰吉

二段へ 早川章次郎

三段へ 吉武吉雄

○六月二十二日無級者月次勝負の結果

四級へ 香下玄人、平岩猪三郎、村山義一、信夫長三郎、神尾金三郎、相澤修二

○九月二十九日講道館有段者月次勝負の結果

二段へ 石渡泰三郎

## 一一 明治四十一年史

明治四十一年より同四十三年までは、記録少なく殆ど勝負表のみを以て埋められてゐる。この頃は、開部以來戦鬪力の最も旺盛なる時代であつて、一城の主たる力量を有する四段三段の巨豪踵を接して出で、都下の諸校を睥睨して、赫々たる武威を東都に輝かした時代である。されば講道館を始め、他校への派遣試合に於ても、幾多の目覺ましき勇戦猛鬪の活劇が演ぜられたるは想像に難からざる所であるが、茲に纏つた記録を掲ぐることは能はざるは、編者の大に遺憾とする所である。

### (一) 卒業生送別紅白勝負

二月十六日、午前八時開催。